

春風はるかぜに 綻ほころびにけり桃の花

枝葉えだはにわたる 疑いもなし

道元禪師

季節の移り変わりの早さには、人それぞれに受けとめ方があります。ついこの間まで、梅の花が寒さのなかで咲きほこっていた。厳しかった寒さも忘れ、日一日と日射しの暖かさを覚える陽春になりますと、大自然のすべては、その生命を躍動やくどうさせる力をみなぎらせてくれます。

冒頭の句は、長年に亘へんって弁道修行べんどうしゆぎやうに精進しやうじんしていて、ある時、桃の花が春の生気を一杯に受けてまっ盛りに咲いている光景を見て、忽然こつぜんとして道を悟られた靈雲禪師れいうんぜんじ（中国・唐の時代）の故事を捉えて詠まれたものです。

この故事は、庭を掃除している時に掃いた石が竹に当たり、その音を聞き悟りを開かれたという香巖禪師きやうがんぜんじの、撃竹げきちくの話と共によく知られているところです。（正法眼蔵しやうぽうげんぞう 溪声山色けいせいさんしやく）

祖師方は、すべてを放下ほうげしてまわりの自然と一体となって生きる時、ふとした機縁きえん（きっかけ）を得て道を悟られた（大地有情だいちじやうじやう同時に成道じやうどうす）のです。しかもそれは、なんの疑いも入る余地のないさとりであったと言います。

時は春、まさに好時節のなかで桃の花がほころぶように、菩提心ぼだいしん（ほとけごころ）をおこして、日々の務つとめに精進しやうじんしていきたいものです。

春風に  
綻にけり  
桃の花  
枝葉にゆた  
疑いもなし  
道元禪師

曹 洞 宗

神奈川県第二宗務所  
第五教区 布教部・出版部

## 解説

道元禪師は、折りにふれ、たくさんのお歌を詠まれています。それは『傘松道詠』と歌集にまとめられて親しまれてきました。

その歌には、人間の心情や、自然がたくみに表現され、文学作品としても高い評価を受けてきました。

また一方では、仏の教えを端的に表し、真髓をズバリと指摘する力強さ、厳しさを句外に偲ばせております。

冒頭の句は、『正法眼蔵』「溪声山色」巻の中にも引かれる靈雲志勤禪師の悟りの話をふまえています。この巻は、谷川の音・竹の音、桃の花等の大自然との触れ合いのなかに、悟りの風光があることを説いています。